

○大阪府貝塚市内3公民館^(*4)

「いわての生涯学習－2004 研究報告－（Ⅱ 生涯学習にかかわる専門的職員の養成に関する研修～公民館職員の養成の在り方を中心に～）」の『5 公民館職員養成に関する県外の事例』から、大阪府貝塚市の公民館の取組を紹介する。

― 事例3 大阪府貝塚市 ―― 市内3館の連携による職員の資質向上 ――

1 公民館の設置状況

中央館1館（中央公民館）

地区館2館（浜手地区公民館 山手地区公民館）

2 3公民館の連携

貝塚市の公民館は平成15年に創立50周年を迎えた。現在の3館体制となるまで、中央公民館が長い間市民の学習を支えてきた歴史を踏まえ、3つの公民館は密接なつながりを持っている。そして、「学びを生かして市民全体のまちづくり」を共通テーマに、様々な連携事業を展開してきた。

また、職員についても、単に各公民館の職員というだけでなく、3公民館の職員集団としての位置付けのもとに、公民館活動の様々な場を職員の研修機会ととらえ、実践している。

3 「3館ミーティング」

3公民館では、連携事業や課題別に担当者会議を持つとともに、職員による「3館ミーティング」を定期的に行っている。原則として毎月第1水曜日、午前中は公民館毎の会議に充て、午後から3館の職員が集まって、それぞれの課題を議論してきた。

さらに、16年度には研修部会を立ち上げ、職員の一層のスキルアップと意思疎通を図るため、研修の一層の充実を目指している。

2004年度 貝塚公民館三館会議 職員研修会のあゆみ

回	月	テーマ	内容	備考
	4月	研修部会準備期間（中央：南） （山手：折出） （浜手：中川）		
	5月			
	6月			
1	7月	ちょっと聞いてよ！	日頃の出来事や講座であったことなど日常に即した話	
2	8月	コミュニティ機材使い方講習	綿菓子機・ポップコーン機・かき氷機の講習	
3	9月	ちょっと聞いてよ！	日頃の出来事や講座であったことなど日常に即した話	前回で話せていない人が対象
4	10月	「あゆみ」を読む		時間がなく研修できず。KJ法を用いたかった。カードは後日まとめて配布
5	11月	ゲストを招いての研修会	◇専門職としての資質向上とは ◇社会教育職員として求められる力	富田林公民館 浮穴正博氏 室井氏
6	12月	①近畿公民館大会各分科会報告 ②1月研修について	富田林公民館、三館訪問と交流研修会の合意	
7	1月	富田林公民館交流研修会	富田林へ訪問	1月12日（水）午後移動 貝塚より15名参加
8	2月	「あゆみ」に向けて（各館で読み合わせ）	今年度の総括および「あゆみ」原稿の読み合わせを各館で行う	
9	3月			

※ KJ法：学習者の意見等をラベルやカードで整理し集約するワークショップの手法

4 3 公民館連携事業

こうした研修や会議を経て、3公民館の職員は協働して様々な企画に取り組んでいる。一緒に事業を進めることで、各公民館の個性が見え、職員同士がその違いを認め合ったり、学び合ったりする機会となっている。

(1) 3公民館連携事業

平成16年度は音楽、演劇、古典芸能の3事業を実施。

(2) 刊行物

ア 貝塚公民館のあゆみ（年1回発行）

事業報告書。各館毎に発行していたものを、50周年を機に1冊にまとめた。

イ 公民館あんない

公民館利用に関するハンドブック。見直しを行いながら発行している。

ウ 公民館タイムズ（年2回発行）

催し物や講座等を、連携事業、各館別にまとめて紹介している。

この他にも、平成15年度に発行した「貝塚公民館50年史」は、職員全員のレポートで構成されており、普段のミーティングでは浮かんでこなかった細かな課題の発見にも結びついた。現在は記念誌に書ききれなかった分野での検証と課題の掘り起こし作業を継続している。

5 利用者の連携

3公民館では、各公民館を利用する団体の連携を進めており、協働の学びの場として研修会等を実施している。こうした場合は公民館と利用者の相互理解の場でもあり、同時に職員にとっての研修機会になっている。

(1) 3館利用者連絡会（年3回）

3公民館で活動する利用者や団体が相互に交流し学び合い、リーダーの研修の場とする。

(2) 3館クラブ講師交流研修会（年1回）

クラブ講師による3公民館の連携強化と公民館活動の意義、文化活動の向上をねらいとした合同交流研修会。

6 地域コミュニティ活動への参画

各公民館は、地域コミュニティ活動の推進に積極的に関わっている。このうち、浜手地区公民館では、地域内の「パークタウン連絡協議会」「二色校区福祉委員会」「地域教育協議会（五中校区すこやかネット）」といった活動の場に、公民館職員がメンバーとして参画している。また、他の2公民館も、各校区の地域教育協議会（すこやかネット）において同様の取り組みを行っている。

こうした取り組みも研修の一つと位置付け、地域との連携を深めると同時に、職員の資質向上に役立てている。

(2) 「取組のポイント2」に係る先進事例

取組のポイント2：地域人材のさらなる発掘と育成を

- ① リーダー、ボランティアの養成のための研修会の実施
- ② 学級・講座を修了した地域住民の、リーダーやボランティアとしての参加の支援
- ③ 「団塊の世代」の経験や知識・技能の学級・講座運営への活用

4.6 ボランティア養成講座（北九州市立小倉南公民館）

～コース選択を取り入れた学習の試み～

4.6.1 事業の概要

(1) ねらいと目的

七つの区から成る北九州市には各区に1館の中央公民館が設置されている。本事業に取り組んだ小倉南中央公民館は小倉南区の中央公民館である。

ボランティア養成講座は、小倉南中央公民館の平成13年度の主催事業として実施された。本講座は、これからボランティア活動を始めようとする市民を対象に、次の三つのコースが準備された。

- ①「子育て支援ボランティア」コース：乳幼児や就学前の子どもを持つ親への支援活動のための、育児・託児等の在り方について学習する。
- ②「高齢者支援ボランティア」コース：特別養護老人ホーム等の施設に入居する高齢者や、公民館や市民福祉センターで開催される各種事業に参加する高齢者への支援活動のための、介助等の在り方について学習する。
- ③「子ども学習支援ボランティア」コース：平成14年度から実施される完全学校週5日制に対応し、学校や公民館等における子どもの学習支援活動の在り方について学習する。



(2) 特色

この講座の特色は、ア. 三つのコースが並行して進行していること、イ. 各コースとも体験活動、交流活動を中心に学習が展開されていること、ウ. 最後に活動発表会を設けることにより、受講者が学習した内容を整理し、実際にボランティア活動へと踏み出しやすいように企画されていること、などがあげられる。



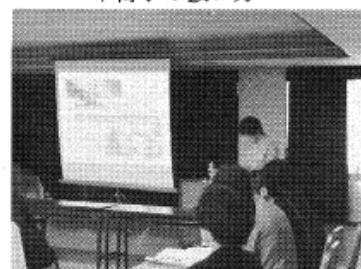
保育体験



車椅子の扱い方



昔遊び（たすけおに）



ミニ発表会

(3) 学習プログラム

	期日	子育て支援ボランティア	高齢者支援ボランティア	子ども学習支援ボランティア
1	共通コース① 10月3日(水)	開講式 オリエンテーション レクリエーション		
2	共通コース② 10月10日(水)	「ボランティアの意義と役割」 講師：北九州大学助教授		
3	選択コース① 10月17日(水)	「ボランティアの現状と課題」 講師：地域子育て支援センター職員	「ボランティアの現状と課題」 講師：特別養護老人ホーム職員	「ボランティアの現状と課題」 講師：小倉南中央公民館社会教育主事
4	選択コース② 10月24日(水)	「活動における基礎基本」 講師：地域子育て支援センター職員	「活動における基礎基本」 講師：特別養護老人ホーム職員	「活動における基礎基本」 講師：小倉南中央公民館社会教育主事
5	選択コース③ 選択コース④ 選択コース⑤ 10月25日以降	「講座体験活動」 ○生涯学習ボランティアとの交流 ○「パパママわいわい広場」へ参加	「介助体験活動」 講師：特別養護老人ホーム職員	「交流活動」 講師：沼公民館・沼市民福祉センター生涯学習ボランティア
6		「一時保育体験活動」 講師：地域子育て支援センター職員	「講座体験活動」 講師：若園市民福祉センター校区社会福祉協議会 ○「ふれあい広場若園」へ参加	「講座体験活動」 講師：沼公民館・沼市民福祉センター生涯学習ボランティア ○「生き生き子ども講座」へ参加
7		「託児体験活動」 講師：城野公民館・城野市民福祉センター託児ボランティア	「介助体験活動」 講師：特別養護老人ホーム職員	「学校体験活動」 ○若園小学校の児童との交流～生活科 昔遊び
8	共通コース③ 11月21日(水)	「ボランティア実践者に聞く～パネルディスカッション～」 パネラー：託児ボランティア「ZOO」、子育て支援グループ「みつばちクラブ」、百瀬ミュージックボランティアグループ		
9	共通コース④ 11月28日(水)	発表会の準備		
10	共通コース⑤ 12月5日(水)	「ボランティア体験活動の発表会をしよう」 閉講式		

4.6.2 事業発足の経緯

小倉南中央公民館は、平成13年度の重点事業としてボランティアの養成を掲げた。その背景には、「高齢化」と「少子化」が急速に進む北九州市の現状があった。

北九州市では、65歳以上の人口が全市の人口に占める割合は、平成8年度16.3%、

13年度では19.6%と年々増加する一方、15歳未満の人口は平成8年度15.0%、13年度では13.7%と確実に減少していた。「高齢化」と「少子化」への対応は公民館にとって重要な課題であった。

北九州市の「高齢化」への対応は早くから始まっていた。「高齢化社会対策総合計画第一次実施計画」に基づき、各小学校区に市民福祉センターを設置、公民館のある小学校区は、既設の公民館に市民福祉センターと同一の機能を持たせる（二枚看板化）など、福祉や保健・医療、そして生涯学習を含めた横断的な取組が展開されていた。

小倉南中央公民館では、ボランティア養成講座の実施にあたり、いろいろな方面の人たちから聞き取りを行った。区内にある14の公民館の職員をはじめ、区内で活動している様々なボランティアグループ、公民館グループ、高齢者大学の受講生など幅広く意見を求めた。

その結果、まず、少子・高齢化に対応する「子育て支援ボランティア」「高齢者支援ボランティア」の二コースが決定し、加えて、平成14年度からスタートする《完全学校週5日制》に対応する「子ども学習支援ボランティア」の計三つのコースが生まれた。

「子ども学習支援ボランティア」コースの開設にあたっては、高齢者大学の卒業生や受講生の「子どものために何か役に立ちたい」という声が大きき力となった。

4.6.3 事業の運営について

本講座は、全10回の学習プログラムのうち、前半の2回と後半の3回が三コース共通、中間の5回がコース別プログラムと、効率的かつ効果的なものとなっている。

前にも述べたように、本講座は座学だけでなく、関係施設でのボランティア体験やボランティアグループとの交流など、より実践的な活動を通じて学習を深めていくよう企画・運営されている。

「子育て支援」コースは、地域子育て支援センターでの保育体験、公民館での託児体験、託児ボランティアグループとの交流、「高齢者支援」コースでは、特別養護老人ホームでの介助体験、市民福祉センターでの高齢者との交流、「子ども学習支援」コースでは、公民館・市民福祉センターでの子どもの創作活動の支援体験、生涯学習ボランティアとの交流、小学校での生活科の学習支援体験、1年生との交流など、いずれのコースも体験活動と交流活動がバランスよく組み込まれている。こうしたプログラムを効果的に進めていくためには、公民館と協力を依頼する関係施設やボランティアグループ、講師や指導者との密接な打ち合わせが欠かせないことはいうまでもない。

後半の3回のプログラムでも、受講者全員が各コースの学習内容や情報を共有し、ボランティア活動についての理解を深めるよう、パネルディスカッションや活動発表会（ミニ発表会）が開催されるなど、学習の効果がより深まるよう綿密に企画されている。

その他、欠席した受講生には学習意欲を継続させるために資料等を送付したり、学習内容や活動内容を記録した学習ノートを作成するなど細部にわたり配慮が行き届いている。

4.6.4 成果と課題

ボランティア養成講座の募集定員は各コース10名程度。最終的な受講者数は「子育て支援ボランティア」コース5名、「高齢者支援ボランティア」コース5名、そして「子ども学習支援ボランティア」コース9名の計19名であった。

講座修了後、様々な動きがあった。子育てサークルを結成した人1名、子育てサポーターとして活躍している人1名、高齢者支援ボランティアとして既存のグループに加入し活動を始めた人4名、子ども学習支援ボランティアとして活動している人2名、活動はして

いないがさらに学習を続けている人もいる。

本講座のねらいは、ボランティア体験やボランティアとの交流などの体験活動を通じて、ボランティア活動の在り方について理解を深めようとするものであった。また、講座修了後、すぐにでもボランティア活動への第一歩を踏み出せるようにと、より実践的な学習内容を取り入れたものであった。受講生の講座修了後の活動から見ても学習の成果は着実に表れており、本講座のねらいと学習方法は的確であったといえるであろう。

小倉南中央公民館の企画・実施したボランティア養成講座～コース選択を取り入れた学習の試み～は予算上の理由により13年度の一年間で終了した。しかしながら、平成14年度は「子育て支援ボランティア」の1コースのみではあるが、13年度の成果を生かし北九州市内のすべての公民館で実施されることとなった。

今、北九州市の公民館事業は新しく、かつ大きな流れの中にいる。前にも述べたように、徐々にではあるが確実に公民館と市民福祉センターの二枚看板化が進み、いずれは公民館という看板ははずされることもあるかもしれない。館の名称は変わっても、「ボランティア養成講座」事業の継続実施を、ぜひ期待したい。

○岐阜県加茂郡富加町「生涯学習アドバイザー養成講座」(2①②)

(岐阜県作成「平成23年度 派遣社会教育主事実践記録」から)

地域の拠点を生かした社会教育

“生涯学習リーダーの育成を目指して”

～ 富加町生涯学習アドバイザー「いきいき楽学塾」の取り組み ～

富加町派遣社会教育主事 安藤由美子

1. はじめに

(1) 生涯学習という視点から見た富加町

富加町は関市と美濃加茂市に隣接する人口約5,700人の町である。現存する日本最古の戸籍「半布里(はにゅうり)戸籍」が1,300年前に作られた場所として有名で、そのレプリカを展示した郷土資料館がある。3つある公民館の他にタウンホールとみか、教育キャンプ場もあり、それらの施設を利用して各種講座が開催されている。

タウンホールとみかには公民館主事1名と公民館指導員3名が勤務し、町内にある3つの地区公民館とタウンホールとみかで行われる公民館講座の運営に携わっている。数年来講師が自主的に企画・運営する「マイ講座」の開催に力を入れており、昨年度は7講座を開講した。また、資料館の活動を補佐する資料館サポーターが、歴史・ものづくり系の夏休み子ども講座を毎年開催し、好評を博している。住民には学びたいという意欲が感じられ、また、自らの知識や技術を他の人のために役立てたいという気持ちをもつ人も現れ始めている。



(2) 生涯学習アドバイザー養成講座

富加町では、さらなる学びの広がりのために、生涯学習を推進するリーダーの育成をねらいとして、平成19年度から生涯学習アドバイザー養成講座をスタートした。養成講座は次のように進められる。まず、希望者に文部科学省認定通信教育講座「生涯学習指導者養成講座 生涯学習ボランティアコース」を受講してもらう。通常6ヶ月程で修了できる通信教育である。受講料は48,500円かかるが、20,000円を町から助成する。並行して、教育課主催の学習会に参加してもらう。学習会は月1回開催し、学習内容に関係した情報、実践の交流を行う。この講座の修了者を「富加町生涯学習アドバイザー」として認定し、平成21年度までに9名のアドバ

イザーを養成した。講座修了後、アドバイザーたちは毎月の学習会に参加し、意見交流を行いながら活動のアイデアを膨らませてきた。そうした動きの中で、自分たちで具体的な活動を始めたいという声が強くなり、平成 21 年度末に「生涯学習アドバイザーの会」を発足させた。

(3) 平成 22 年度の取り組みと課題

生涯学習アドバイザーの会発足後、平成 22 年度に行った活動は、主に「先進的な取り組みを続ける団体に学ぶ」「住民のニーズを把握する」「住民のニーズに応える」の 3 つである。

① 先進的な取り組みを続ける団体に学ぶ

可児市の NPO 法人「生涯学習かに」の代表者からその活動について説明を聞く機会を設け、学習相談などの活動を実際に見学させてもらった。学習相談や講座運営については、後の活動の参考となることを多く学んだ。

② 住民のニーズを把握する

公民館講座の様子を実際に参観した。また、月に 1 回、町内各所で学習相談会を実施し、個人の生涯学習傾向を示すグラフを手渡し、そこから、住民の生涯学習に関する要望や関心を探る対話を行った。また、意見箱の設置やイベント時のアンケート調査も行い、そこから得られた情報を、各種講座担当者に提供した。

③ 住民のニーズに応える

上記②の活動から得た住民の声をもとに、2 つの活動を企画した。1 つ目は生涯学習情報誌・HP の改訂である。講座の担当者ごとにばらばらに講座案内が出されるのでわかりにくいという声があったため、それらをまとめた生涯学習情報誌を作成した。HP は講座に関する情報がわかりやすい形で、かつリアルタイムで提供できるよう、内容や様式を変更した。2 つ目は、講座の重なりをなくす調整会の実施である。町内には高齢者を対象とする講座が複数あるが、担当機関が異なるため、その調整がなされず、内容や日にちが重なることがあった。そこで、講座担当者に集まってもらい、互いの活動内容を交流し、調整する会を企画した。

こうした活動を行ってきたわけではあるが、その結果は生涯学習アドバイザーが満足できるものにならなかった。その要因として、住民の反応が薄いこと、自分たちで創り上げた実感がないこと、自分たちの持っている力を生かしてきていないことが考えられた。この状態が続けば、せっかくやる気が出てきたリーダーをつぶしてしまうことになる。そうしないために、次のような方策を考えた。

2. 課題改善のための具体的方策

生涯学習アドバイザーの活動を満足できるものにするためには、彼ら自身で練り上げて創る活動が必要であり、かつ、それが彼らの力を十分に発揮できる活動になっていなければならない。また、その活動が住民から本当に必要とされるものであることも大切である。

そこで、新たに総合講座にチャレンジすることにした。総合講座とは、その講座全体を貫くテーマをもち、そのテーマに多様な視点や方法で迫る講座のことである。

総合講座という形を選択した理由は、3 つある。1 つ目は、多くの住民の参加が期待できるからである。今日的課題や地域課題をテーマに設定すると、通常講座の場合、テーマの追究方法が 1 つに限定され、幅広い住民の関心を集めることができない。総合講座なら、講師や方法に変化があり、それも防げる。また、総合講座という形はそれまでの町内の講座にはなく、そういった意味でも関心を集められると考えた。

2 つ目は、講座の企画において、生涯学習アドバイザーのアイデアやコーディネート力が十分生かせるからである。生涯学習アドバイザーはそれぞれ活動分野が異なり、その実践の中で築いてきた豊かな人脈も持ち合わせている。それを余すところなく発揮するには、多くの講師や追究方法が取り入れられる総合講座が適している。

3 つ目は、資料館サポーターと合同で取り組めるからである。富加町では、平成 20 年度から 3 年間、郷土資料館の運営をサポートする人材の養成講座を開催した。その修了者は 21 名おり、町の「資料館サポーター」として認定され、活動している。夏休みに小学生を対象として行っている歴史・ものづくり系の子ども講座では、藍染め、竹ご飯作り、紙漉、円空仏彫りなどの内容を扱っているが、サポーターの中に、その対象を大人にも広げたいという思いがあった。また、講座担当者は、サポーターを講座の補佐だけでなく、より積極的に企画や運営に携われるような存在に育てたいという願いをもっていた。総合講座を考えた場合、歴史や文化に関わる内容が関係してくることは必至であり、講座運営に長けた資料館サポーターの協力は、生涯学習アドバイザーにとっても大きな支えとなることが予想された。

3. 平成 23 年度の実践

(1) 総合講座開設まで

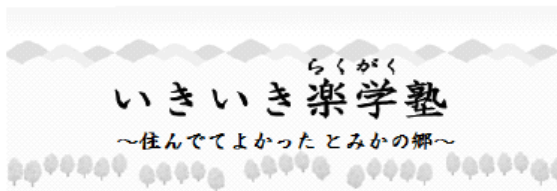
平成 22 年度末に新たなメンバー 3 名を加え、合計 12 名となった生涯学習アドバイザーの会は、平成 23 年度、総合講座の開催を活動の中心に据えた。総合講座は資料館サポーターと合同で開催することとし、生涯学習アドバイザーの会で原案を作成し、それをサポーターとアドバイザーの代表が出席する合同会議にかけ、そこで出された意見を再び双方の会におろして確認するという手順で講座の計画を進めた。

月	会 議	内 容
2	アドバイザー定例会	総合講座のコンセプト案作成
3	合同会議	テーマ・内容のアイデア収集
4	合同会議	各回の内容案作成
5	合同会議	各回の内容決定、分担・代表者決定
6	講座代表者会	各回の詳細案作成
7	全体会・講座担当者会	分担者で各回の計画
5	講座ごとに打ち合わせ	講師への交渉、道具や材料の準備
8	講座代表者会	各回の詳細確認、チラシ作成
5		
2週間前	講座担当者会	運営方法の確認

講座各回の大まかな内容が決まったところで、アドバイザーとサポーター混合で 3～5 名のグループを作り、どの回を担当するかを決めた。以降はそのグループごとに打ち合わせを持ち、内容の詳細を煮詰め、準備を進めた。

(2) いきいき楽学塾の誕生

「いきいき楽学塾」の誕生



らくがく
いきいき楽学塾
～住んでてよかったとみかの郷～

「このまちに住んでよかった。」誰もがそう言える富加のまちにしたい。そんな願いからこの講座は生まれました。
このまちのこと、このまちに暮らす人のこと、そして一人一人の生き方を、一緒に考えてみませんか？

こうして、できあがった講座が「いきいき楽学塾」である。この講座のねらいは、富加のよさの再発見と自分の生き方を見つけることである。

対象者は生涯学習のきっかけをつかんでほしい 50～60 代とし、講座回数は無理なく開催できそうな 5 回に抑えた。各回の切り口は、第 1 回目が「自然」、第 2 回目が「歴史」、第 3 回目が「まち」、第 4 回目が「地域と仲間」、第 5 回目が「老い」とした。前期を準備期間とした方がじっくり取り組め

るということで、平成 23 年度の後期から開催することにし、受講料は受講生に学ぶ意識をもってもらうために 1,000 円徴収する方向で落ち着いた。

各回の内容は以下の通りである。町外からの申し込みもあり、受講生は 37 名集まった。

	講座名・日時・会場	内 容	講師・発表者
第 1 回	楽しい富加の里山めぐり ■ 10月9日(日) ■ 午前10時～午後2時 半布ヶ丘キャンプ場	富加の財産でもある豊かな自然にふれよう！ 植物や歴史に親しむ里山散策あり、竹筒ご飯やバームクーヘン作りあり、盛りだくさんの講座です。	町内在住 東山照さん
第 2 回	野の仏を訪ねて ■ 11月12日(土) ■ 午前9時～正午 富加町内各所	街角でほほ笑む野仏、お寺の参道で道行く人を見守る石仏、歴史や人々の願いを抱え、富加に何百年もたたずむ石造物を歩いて巡ります。	町内在住 安藤剛さん
第 3 回	ちょっと知っ得とみかの色々 ■ 12月18日(日) ■ 午後1時～午後4時 富加町内各所	町内に住んでいても意外に知らない富加の隠れた名所に行ってみませんか？ 歴史スポットからおもしろスポットまでバスで案内します。	町学芸員 島田崇正さん
第 4 回	こんな生き方知ってる？ ■ 2月12日(日) ■ 午後1時～午後3時 タウンホールとみか	人生の楽しみ方は人それぞれ、でも仲間ができるとさらに楽しめる ― 町内で仲間とともに魅力ある活動を展開する方々を紹介します。	親和会 あぜ道仲間の会 WTMY会

第5回	やっておきたい老前整理 ■3月17日(土)■ 午後1時～午後3時30分 タウンホールとみか	老いる前に一度考えてみませんか 今後の人生を自分らしく心穏やかに過ごすために、今何を考え、何を準備すればよいのか、具体的に学びましょう。	社会保健労務士 行政書士 認知症学習療法士 県生涯学習コーディネーター 林靖子さん
-----	--	--	--

第4回、第5回の講座内容は、特に「いきいき楽学塾」のねらいをよく表す内容となった。第4回の「こんな生き方知ってる？」は町内の3つの団体の実践発表である。どの団体も、自主的に集まり、特産品作り、ギャラリー企画展、ボランティアイベント等を通してまちづくりを行っているが、住民に広く知られてはいない。そこで、行政主導でない新しい生涯学習の実践例として紹介し、住民の生涯学習に対する意欲を向上させたいと考えた。第5回の「やっておきたい老前整理」は、誰もが避けては通れない内容だが、なかなかこれまでの講座では取り上げにくかった。ぜひ、取り上げてほしいという住民からの強い要望に応える形で企画した。

講師や発表者は、生涯学習アドバイザーがその人脈を生かして探し出してきた。この人に学んで絶対に損はないと太鼓判を押して推薦した方たちばかりである。講師や発表者の発掘、依頼はもちろんであるが、リハーサルから講座当日の運営までのほぼ全てを各担当が中心となってやりきった。

4. 成果と課題

【成果】

○「いきいき楽学塾」は受講生が満足できる学びの場となった。これまでになかったテーマや内容の講座となり、受講後の感想では「楽しくて、なおかついい勉強ができた。」という声が多く聞かれた。

○地域の宝を発掘し、広めることができた。住民の身近にあっても意外に知られていないことが多く、わが町のよさを再発見してもらう機会となった。特に、地域の優れた人材を多くの人に紹介できた点がよかった。40代男性受講者が、講座の中で、「あの講師の先生はすごい。何を聞いても知ってみえる。こんな人が富加にはおるんやねえ。」と、しきりに感心する姿が印象的だった。



<第1回いきいき楽学塾の様子>

○生涯学習アドバイザーが満足感を得ることができた。各々の高いコーディネート力を生かして住民のニーズに応える活動を仕組めた点が満足感につながった。また、協力者との調整、運営上の諸問題等の多くの課題を試行錯誤を繰り返しながら解決し、自分たちの手で創り上げたと言える活動になったことで、彼らに新たな自信とやる気がうまれた。来年度も「いきいき楽学塾」は生涯学習アドバイザーの会の中心的な活動として継続していく予定である。

【課題】

●活動は軌道に乗りつつあるが、生涯学習アドバイザーの会の組織化ができていない。今後活動を充実させていくためには、会の組織化を図ることが急務である。

●生涯学習に取り組むメンバーが固定されており、特に男性の参加者が少ない。生涯学習アドバイザーを見ても男性は12名中3名、いきいき楽学塾受講生は37名中4名である。住民のニーズに合った豊かな学びを実現するためにも、今まで参加していない人が関心をもち、参加しやすい環境を作る工夫が一層求められる。

●生涯学習アドバイザーの活動は公民館と切り離しては考えられないが、現在は2者が別々に講座を開催している状態である。今後それをどう関わらせていくのか、検討する必要がある。また、アドバイザーが生涯学習リーダーとして活動を広げていくためには、将来的にどのような立場で公民館活動に関わっていくのかを明確にしておくことも重要である。

5. 終わりに

何気なく「生涯学習リーダーを育てる」という表現を使うが、私が生涯学習リーダーを“育てた”わけではない。生涯学習リーダーは“最初からそこにいた”。生涯学習の必要性を感じ、そのために自分が貢献したいと思っている人は、どんな小さなまちにも必ずいる。自分だけでは行動できなくても、何人か集まれば行動を起こすことができる。同じ思いの人をつなげば、

その人たちが踏み出す原動力が生まれるのだ。それが、富加町の場合は「生涯学習養成講座」や「生涯学習アドバイザーの会」であった。また、何かを与えたいと思う人もいれば、何かを得たいと思っている人も必ずいる。両者をつなぐことで、生涯学習が成立するのだと思う。それを実現したのが「いきいき楽学塾」という機会だった。社会教育という仕事は、お互いに必要だと感じる人同士をつなぎ、その人たちが輝くようにしていく仕事のように思える。

○大阪府貝塚市立中央公民館（2①）^(*6)

様々な能力を有した地域人材を活用し、地域とつながるための活動を行っている。また、主催事業以外の団体数・利用者数も多く、最近では公民館運営審議会も充実した会議展開を図っている。

【子育てサポータースキルアップ講座「地域の子育て支援を考える」】家庭教育学級連絡会・PTA協議会・民生委員・更生保護女性会・子育てグループ・子育てネットワークの会・保育ボランティア・行政職員を対象に、教育と福祉が連携して子どもたちを取り巻く環境や学校・家庭の現状についての講座を開催している。毎回、ワークショップによる意見交換を行い、それぞれの立場で、取り組めることを考えている。

○神奈川県秦野（はだの）市立渋沢公民館（2①）^(*7)

市民が自ら学習した成果を生かす場として、市民企画提案型事業やボランティア講師事業を実施している。また、市民が蓄えた知識や技術を生かして講師となり、生きがい作りのための講座を公設民営型で開催している。

【市民企画提案・ボランティア講師事業】学習の成果を生かしたいという市民の欲求に応え、人生をより一層豊かなものとすべく、その学習を仲間づくりやより良い地域社会づくりにつなげていくことを目指している。意欲ある講師を募集し、それら講師による企画提案事業としてパソコン教室、スポーツ吹矢教室等、趣味、地域資源活用、健康づくり、環境問題に関わる様々な分野の事業を実施した。

○兵庫県神戸市立住之江公民館「住之江教えマスター制度」（2②）^(*9)

6 人づくり・地域づくりの支援拠点としての公民館の取組 ～「住之江教えマスター制度」～

（兵庫県神戸市立住之江公民館）

<キーワード> 学習成果の活用 コーディネート 公民館ボランティア
グループ活動支援

（1）神戸市東灘区の概要

住之江公民館がある東灘区は神戸市の最も東南に位置し、東西約5キロメートル、南北約8キロメートルを擁する区である。北に六甲山地を控え、南には大阪湾に臨む住吉川の扇状地が広がるという地形が、夏は涼しく、冬は穏やかであるという気候をつくり出している。三宮まで15分、梅田まで30分というアクセスの良さと海と山に挟まれた豊かな自然環境が好まれ、近畿有数の住宅地として発展してきた。

平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災では震度7の激震が記録され、家屋の約半数が全半壊となり、1,470名の方が亡くなるなど、最も被害の大きい地域であった。しかし、復興に向けた地域の取組が進み、平成12年11月には区人口が震災前を上回り、現在208,607人（平成22年4月1日現在）、市内9区中4番目の人口となっている。

現在の東灘区は年間出生者数が2,000人を超え、区外から転入してきた30歳代から40歳代の若い子育て世代の構成割合が大きい「多子高齢化のまち」である。区内居住者の7割がマンション住まいであり、震災後に転入した区民が全住民の5割を占めている。

(2) 公民館の状況

ア 住之江公民館の概要

9つの行政区からなる神戸市には現在7つの公民館(住之江、葺合、清風、長田、南須磨、東垂水、玉津南)があり、それぞれが地域の実情に応じた「特色ある公民館づくり」を展開してきた。

住之江公民館は昭和51年5月の開設以来、地域の社会教育・生涯学習の拠点として多くの人々に親しまれ、文化・教養・スポーツなどの学習活動をする場として、また子どもから大人まで、いろいろな年代の学習者が集う仲間づくりの場として利用されている。

平成21年度には35,000人を超える利用があり、そのうち登録グループ活動での利用が3割、講座・教室での利用が2割弱を占めている。

(注) 登録グループ

公民館に登録した自主活動グループのこと。神戸市立公民館では登録グループの育成および活動支援を事業の柱に据えている。

住之江公民館では登録グループのリーダーが年5回集まり(登録グループリーダー会)、公民館からの連絡事項の伝達や事業についての意見交換、リーダーやグループ育成のための研修を行っている。全グループが参加できるように、午後(15:00～)と夜間(19:00～)の2部制で実施。

イ 運営体制(平成22年度)

(ア) 職員の構成

館長1人(事務職)、副館長1人(嘱託/元小学校長)、指導主事1人(教員)、事務職員1人(事務職)、技術職員1人、嘱託2人

(イ) 住之江公民館運営審議会(住之江公民館の今後の管理運営)

○ 運営審議会委員5名(住吉小学校長、住之江地区協議会会長、同協議会副会長、前住吉婦人会住之江支部長、住之江児童館長)

○ オブザーバー2名(教育委員会社会教育部生涯学習課長、東灘区役所まちづくり支援課長)

○ 事務局3名(住之江公民館館長、同公民館副館長、同公民館指導主事)

※ 平成22年度は4回開催

(3) 特色ある事業・運営に至る経緯

生涯学習時代を迎え、生涯にわたり学習を続けたいという人が増加している。一方、学んだ知識や成果を地域社会や市民生活に還元したいという人が活躍の場を求めている。このような中、学習還元活動の支援を通して人づくりや地域づくりに資することが公民館の大きな使命であるという認識の下に、市内7公民館がそれぞれ登録グループの活動支援を行っている。

(注) 学習還元活動

学習還元活動とは、「公民館における学習成果を生涯学習ボランティアとして地域社会や市民生活の場に還元する活動」(「神戸市公民館グループ登録及び支援に関する要綱」参照)のことで、具体的には、グループ活動で学んだ知識や経験を公民館の講座の中で他者へ教えたり、施設等へボランティアとして出かけたりすることなどである。各公民館は実態に合わせつつ積極的に参加・協力を推奨しており、学習還元活動の意義もグループ生や利用者に広く理解されつつある。

住之江公民館では登録グループの学習還元活動を更に進めるため、またその活動を

通じて共に支え合う生涯学習社会の実現を目指して、平成 20 年に「住之江教えマスター制度」を創設した。

同公民館は当該制度の創設に先立ち、登録グループや公民館運営審議会に対して制度の趣旨を説明したり、質問紙調査やヒアリングによる意見聴取を行ったりした。

また、当該制度の創設以前から神戸市には複数の人材登録制度があったため（神戸市生涯学習支援センターの生涯学習市民講師登録制度、東灘区社会福祉協議会ボランティアセンターのボランティア登録制度）、制度の構想段階で関係機関にヒアリングを行っている。そこでの意見は、当該制度の主たる目的は登録グループの学習還元活動の支援であり、既設の人材登録制度とは異なるので問題ないこと、窓口が複数あることによって登録や利用がしやすくなり、市民による自主的な活動が活発になることが期待できるので、連携を図りつつ進めていくのが適当であるというものであった。

（４）特色ある事業・運営の概要

ア 趣旨・目的

「住之江教えマスター制度」は、同公民館の登録グループと講師や指導者としての活動や作品の展示などを求める地域の公共機関等を住之江公民館が結びつけることによって学習成果を地域に還元する活動を応援するための講師登録制度である。平成 19 年度に実験的にスタートさせ、平成 20 年度から本格実施している。

イ 内容

住之江公民館が主催するサマースクールや短期講座（春季講座・秋季講座）の講師として受講生や子どもたちを指導するほか、区内の公共施設・行政機関などが開催する概ね 10 人以上が参加する行事で講師をしたり、作品の展示を行ったりしている。

登録グループの行う活動は原則として無償で、会場借り上げや資料の印刷に要する経費・交通費等は依頼者が負担する。

ウ コーディネートの手順

- ① 「住之江教えマスター」に登録を希望するグループは、登録申請書を住之江公民館に提出し、登録証の交付を受ける。
- ② 住之江公民館は、「住之江教えマスター」制度及び教えマスター登録グループに関する情報を公民館のホームページ、公民館だより「えみのす」（隔月発行）への掲載などの方法により広く広報する。
- ③ 住之江公民館は、学校園・社会教育施設・社会福祉施設等からの依頼を受け、依頼内容を説明するなど依頼者と教えマスター登録グループとの調整を行う。
- ④ 依頼内容に同意した教えマスター登録グループを依頼者に派遣する。
- ⑤ 派遣されたグループは、活動実施後、公民館に活動報告を提出する。公民館に活動についての評価や意見などが寄せられた場合には、個々のグループに口頭で伝える。

エ 活動状況

平成 21 年度は同公民館の登録グループ 39 グループ全てが活動した（229 回）。

活動先別でみると、地域での活動が 105 回（幼稚園（23 回）、児童館（22 回）、デイサービスセンター（19 回）など）、公民館での活動が 124 回（講座・教室の講師、作品展への出品、公民館まつりでの舞台発表、公民館内の展示スペースへの出品、公民館行事の受付など）となっている。

（５）成果と課題

ア 成果

- 登録グループ数は減少傾向（平成 17 年度 46 グループ→平成 21 年度 39 グループ）にあり、活動数も減少しているが、登録グループによる学習還元活動の数は

年々増加している。

- 学習還元活動への参加が、登録グループの活動目標を明確にするとともに、「個人の要望」と「社会の要請」を結びつける地域貢献活動となっている。
- 登録グループの活動が地域で認知されることにより、登録グループとしての自覚と責任感が強くなり、公民館を盛り立てていこうという機運が見られる。
- グループの活動が知られるようになり、施設等からグループに直接依頼が入るケースが多くなってきた。
- 登録グループの制作した作品が福祉活動に活用されたり、災害等の被災地へのお見舞いのための活動としても実施されるようになってきた。

イ 課題

- ① 依頼されるグループに偏りが生じてきており、現在は五つほどのグループに依頼が集中している。また、グループと依頼者の固定化も生じている。登録グループの学習還元活動のさらなる推進にあたっては、コーディネーターとしての公民館が果たすべき役割について検討する必要がある。
- ② また、学習還元活動の質の向上のためのフォローアップを実施することも課題の一つである。

ウ 今後の方向性

上記の課題①については、コーディネート機能の充実・強化を図るための第一段階として、地域のニーズやグループの特徴や実績などの情報収集を幅広くかつきめ細かく行い、それを調整に生かしていくことが考えられる。地域のニーズ把握については平成23年1月より、住之江公民館の職員全員が地域の学校園や福祉施設等を訪問することにより、登録グループが「住之江教えマスター」として学習還元活動を行う場所を新たに開拓すると共に、訪問先のニーズや地域が抱える課題の把握に努めることを目的とした「公民館セールス」を実施している。課題②については状況を見ながら実施していく。

(6) 事例から学ぶこと

住之江公民館では、地域での活動経験がない登録グループに対して、学習成果を地域で活用するための足固めとして同公民館の主催講座の講師を勧めている。登録グループはこの機会を活用して地域に出る前に指導に当たっての問題点を把握できるとともに、地域での活動に躊躇しているグループにとっては活躍の場が広がるきっかけとなるだろう。

また、公民館職員が登録グループリーダー会や公民館だよりなどの様々な機会や媒体で教えマスター活動の紹介を発信し続けている。このことは教えマスター登録グループの活動継続の励みになるとともに、教えマスター活動を行ったことがないグループに対しては学習還元活動への参入を促進する役割を果たしていると考えられる。

<参考資料等>

- 『住之江公民館の今後の管理運営のあり方について「人づくり・地域づくりの支援拠点」を目指して』神戸市住之江公民館運営審議会、平成21年1月
- 『中期三カ年計画（平成21～23年度）～公民館を感動の場に』神戸市住之江公民館、平成21年2月
- 『東灘のあゆみ』東灘復興記念事業委員会、平成12年3月 など

<聞き取り調査協力者>

(田井 優子)

所 属	氏 名
神戸市立住之江公民館長	片山 信英
神戸市教育委員会社会教育部生涯学習課地域教育係長	綱岡 俊宏

○岐阜県本巣市本巣公民館「もとすガキッコクラブ」の活動（2②③）

本巣市本巣公民館では、平成6年から「①全世代への生涯学習推進の一環 ②地域ならではの「子どものクラブ」設立 ③青少年の健全育成（休日の有意義な活用・仲間との連帯感の深化） ④自主・協力する態度、ボランティア精神の養成」の願いのもと、子どもたちに学習体験（学ぶ・遊ぶ・挑戦する・失敗する・仲間をつくる）の機会を提供する「もとすガキッコクラブ」を展開している。4つの特色ある活動があり、それぞれで地域住民等を講師として招いている。 ※（ ）は講師

○世代間（異年齢）交流の場…グランドゴルフに挑戦（本巣GG連盟会員）、水墨画に挑戦（水墨画クラブ協会会長）等

○郷土の歴史・文化の伝承…陶芸に挑戦・織部焼き体験（陶芸士の華クラブ会員）、美濃もとす太鼓に挑戦（美濃もとす太鼓保存会）等

○ボランティア精神の高揚…ボランティア44「徳山の家」清掃（社会教育指導員・JLクラブ）

○自主・自立・連帯感の育成の場…川釣りを楽しもう（根尾川筋漁協組合員・JLクラブ）、谷汲大橋キャンプ場宿泊活動（社会教育指導員・保護者会引率者・JLクラブ）

○大阪府豊能（とよの）町立西公民館（2②③）^(*6)

豊能町立西公民館では、公民館利用者、活動団体の知識や技能を活用し、地域のつながりをつくるための講座に積極的に取り組んでいる。

【地域の人材育成・活用事業】作品製作、実技演習、舞台鑑賞など、様々な講座で地域の人材を生かした講座づくりが積極的に行われ、月1回通年で実施している高齢者のための講座「ウグイス大学」では、参加者の中から運営委員を選出し、参加者も企画運営を担っている。さらに、「ウグイス大学」の受講者や公民館で活動するたくさんのグループが「子ども講座」の講師として参画するなど、世代を超えた地域のつながりができている。

○岡山県津山市高倉公民館（2③）^(*7)

少子・高齢化が進む中、団塊世代を中核として、学校・家庭・地域が連携・協働し、地域活性化に向けて積極的・継続的に取り組んだ「団塊世代の地域デビュー支援講座」等の成果を生かし、「高倉の歴史かるた」を製作するとともに、かるた取り大会等地域一体となった取組を展開している。

【地域づくり支援事業】公民館を核として、学校・家庭・地域が連携して様々な取組を進めることにより、地域の活性化を図っている。特に今後の地域づくりの中核を担っていく団塊世代をターゲットとした取組を通じて、子どもから高齢者まで、各世代を通じて地域力の向上を目指している。

(3) 「取組のポイント3」に係る先進事例

取組のポイント3：地域の社会教育を推進する主催事業（学級・講座）を

- ①＜企画・運営・実施＞ 地域住民や学校、関係機関・団体との協働
- ②＜空間＞ 地域住民が気軽に立ち寄り交流できる空間
- ③＜周知・相談＞ 地域住民への学習情報提供と学習相談
- ④＜参加＞ 多くの地域住民の参加と、異世代・多世代の交流
- ⑤＜内容＞ 個人の要望だけでなく社会の要請にも応える内容

○岐阜県恵那市岩村コミュニティーセンター「子ども講座『知新塾』」（3①）^(*3)

儒学者佐藤一斎の「三学の精神」を基盤とした地域・まちづくりの方向性を打ち出して活動している。また、その活動を支えているのが市民の自発的結社であり、しかもそれが住人の生涯学習・社会教育を通じて結成されている。

【子ども講座「知新塾」】「伝統ある良きものにこだわる」を基本理念に地元のプロ職人、得意とする分野をもつ人など、地域の人に講師を依頼し、自給自足講座をモットーにしている。子どもたちの興味関心を引き出し、学ぶ意欲・姿勢を創ること、先人の教えに学ぶことをより大切にしている。

